

Guy G. Stroumsa (ギー・ストロムザ) 教授

研究セミナー：

オリエンタリズムと一神教：エルネスト・ルナンによるユダヤ教とイスラーム教

(Orientalism and Monotheism: Renan on Judaism and Islam)

特別講演：

古代末期における二元論の多様性

(Varieties of Dualism in Late Antiquity)

2024年2月16日(金) 10:30-14:30

エルサレム・ヘブライ大学(イスラエル)およびオックスフォード大学(イギリス)のギー・ストロムザ教授に、近代西洋の一神教研究についての研究セミナーと、古代末期の諸宗教における二元論の観念についての講演をしていただきました。

研究セミナーは、2021年度の大学院演習で講読したご著書 *The Idea of Semitic Monotheism* (2021) にもとづく内容であり、『イエスの生涯』で知られるエルネスト・ルナンの「セム的一神教」の概念と研究に焦点を当てる内容でした。また、セミナーの後半では、教授の師であるツヴィ・ヴェルブロフスキー(R.J. Zwi Werblowsky)が構想し、大きな貢献をはたしたヘブライ大学文学部の比較宗教学科の成立と展望についてもお話しをいただきました。

特別講演は、ゾロアスター教に始まり、キリスト教グノーシス派(ヴァレンティノス派やマルキオン派)、マニ教などに受容され、展開されていった二元論的な観念をテーマとする古代宗教史研究の内容でした。古代末期の二元論的な宗教運動は一神教的な神観念や世界観との複雑な関係のなかで多様化し、ふたつの原理や神の関係性も決して対等なものではなく、むしろその均衡の崩れがさまざまなかたちで解釈されていたことが特徴的である、という論点が提示されました。

講演後は研究室で歓談の機会を持ち、イスラエルの宗教研究の様子や、日本の宗教の研究や宗教間対話にも積極的であったヴェルブロフスキー教授の人となりについてもお話しを聞くことができました。

ご自身の博士課程時代の指導教員でもあるストロムザ先生を招へいし、このような貴重な機会を与えてくださった主催者の山城貢司博士(東京大学先端科学技術研究センター研究員)に厚く御礼申し上げます。

文責：志田雅宏

